

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：35412  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2017～2021  
 課題番号：17K04659  
 研究課題名(和文) 乳幼児・児童期における芸術表現活動の構築 「美的経験」に着目した芸術実践と応用

研究課題名(英文) Building artistic expressive activities in childhood, Art practice and application focusing on aesthetic experience

研究代表者  
 小笠原文 (Ogasawara, Fumi)  
 広島文化学園大学・学芸学部・教授

研究者番号：10585269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：2017年度はイタリア・ピストイア市の幼児教育政策に関する文献の翻訳および教育文化局教育コーディネーターへの質問紙による調査を行った。2018年度はフランスの芸術教育の展開について1980年以降の政府資料を手がかりに調査を行った。またフランスの保育学校2園における視察を行い、2019年度に前年度までに実施した海外調査の検証および発表を行った。2020年度と2021年度は子どもの美的教育に関する文献を収集し、解釈を深めた。フランスの芸術教育思想と実践を基軸としながら、子どもの表現活動の実践事例を基に「芸術と子どもとの出会い」について調査・検証・評価を行うという目的を達成した。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、各国でOECDのPISA型学力重視の教育政策が推進され、初等・中等教育課程における芸術教育は、大きな転換期を迎えている。さまざまな教育方法が模索される中、「子どもの美的経験」を主軸とした芸術教育を展開するフランスの芸術教育に着目した。フランスの芸術教育の理論的・歴史的な変遷を整理し、フランスを含めたヨーロッパにおける現在の芸術教育実践を検証することで、芸術と教育の関係性を問い直し、わが国の造形表現教育について再考する手がかりを得ることができた。

研究成果の概要(英文)：In 2017, literature on early childhood education policy in Pistoia was translated and a questionnaire-based survey was conducted with education coordinators from the Department of Education and Culture. In 2018, a survey was conducted on the development of arts education in France, using government documents from 1980 onwards as a starting point. Also carried out research in two French kindergartens. In 2019, the international research carried out up to the previous year was examined and presented. In 2020 and 2021, literature on children's aesthetic education was collected and interpreted. In 2019, research on the development of art education in France was carried out, starting with government documents from 1980 onwards. Based on the philosophy and practice of art education in France and practical examples of children's expressive activities, the project achieved the research, verification and evaluation of the 'encounter between art and children'.

研究分野：フランスの造形芸術教育

キーワード：フランスの芸術教育 子どもの表現活動 美的経験 乳幼児の造形教育

## 1. 研究開始当初の背景

現在、初等・中等教育における美術、音楽、ダンス等の科目を含む芸術教育のあり方は、激的に変化し、大きな転換期を迎えている。それは、わが国に限らず、多くの先進諸国で見られる傾向で、その背景には OECD の PISA 調査を意識せざるを得ない各国の教育政策がある。「リテラシー」が判りやすい教育目標と直結し、「エビデンス」が最優先事項とされる PISA 型学力追従の風潮の中で、芸術教科はある種の劣等感を抱いている。それは、芸術教科はその特質から、「学力重視」とも「エビデンス重視」とも折り合うのが困難であることに起因する。実際に 2000 年以降に各国で行われた教育改革を確認すると、一様に芸術教科に関する授業時間数や専任教員数の削減といった軽視傾向が見られる。

そのような状況の中で、フランスの芸術教育の動向に着目をした。「学力」と「エビデンス」に重きを置かざるを得ない教育の現状はフランスにおいても他国と同様であるが、授業数削減という教科としては危機とも受け取れる状況を変革の好機ととらえ、芸術そのものとして教育的に意味あるものへと思想の変革と実践を通じて積極的に変更しようとする動向が現在フランスの芸術教育に見ることができるところである。フランスでも、わが国と同じ 2008 年に初等・中等教育における芸術教科の時間数が削減されている。就学前教育においても、2008 年に改訂された新しい学習指導要領では、年少組からフランス語の学年進度表が示されるなど、言語教育に重点が置かれた。

一方で、わが国における授業時間数削減とフランスにおける授業時間数の削減は、芸術教科軽視という観点から見ると異質である。フランスにおいて「すべての人が芸術と文化遺産にアクセスできること」、つまり、文化の民主化としてスタートした芸術教育が、「各人が自分の好みに応じて芸術的实践ができること」へと移行し、2008 年の改革では「すべての人が基本的な人間の経験としての美的経験にアクセスできること」とする思想的な深化を経て、芸術教育の授業形態を理論の裏付けをもってダイナミックに変化させているからである。この「美的経験へのアクセス」を目的とした芸術教育実践を調査・研究対象とすることとした。

## 2. 研究の目的

現代フランスの「美的経験へのアクセス」を目的とした芸術教育の教育思想と実践が本研究の基盤となる。現代フランスの芸術教育の動向の根底には、シラー(J. Ch. F. von Schiller、1759-1805)、リード(H-E. Read、1893-1968)等の思想を読み取ることができるが、今日欧州圏で注目されているケルラン(A. Kerlan)が主張する「芸術を基礎とする教育システム」の構想の影響は大きい。「芸術を基盤とする教育システム」とはいったいどのようなものであるかを明らかにし、わが国における芸術教育再考の手がかりを得たいと考える。

そのために本研究では、フランス、イタリアおよび日本における乳幼児・児童・生徒の表現活動や芸術活動の中での子どもの「美的感性」や「美的経験」を比較考察し、その実践活動を事例に芸術と子どもとの出会いと交わりについて研究調査をおこない、その全体像を検証し評価することを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究は研究代表者・小笠原文が国内外複数の専門家の協力を得て行う個人研究の形態をとる。

(1) 研究代表者は2011年から2013年にかけて科学研究費の助成を受け、「幼児教育における造形表現プログラムの開発と実践—フランスにおける事例とその応用—」というテーマで研究を行った。研究の概要はフランス西南部、アーキテーヌ州ペリグー市にあるサン・フロン小学校で行われた「他者理解」「共存の精神」の獲得を目的として行われた幼児造形表現プログラム：『弱視・盲目の子どものために、クラスで絵本を制作する』（サン・フロン・プロジェクト 2006—2007）を一つの事例として本プロジェクトを日本でも実施するというものがあった。その成果としては、日本での実践を国際的連携・比較の中で検証・評価し、幼児教育における造形教育（表現教育）の新たな可能性を示唆したことが挙げられる。

(2) この研究の成果・反省から、特に人間の本能ともいえる「衝動」活動に着目し、幼児教育の表現教育活動のプログラムの開発と実践および検証を目的として行った研究が、2014年から2016年にかけて科学研究費の助成を受けて行った研究「幼児教育における表現教育プログラムの開発と実践—仏・米・日の包括的教育の事例と応用—」である。本研究はフランス、アメリカおよび日本における幼児の表現活動、特に、障がい児と健常児の相互理解を促すための実践活動を事例に、最初期の集団生活（保育所、幼稚園、小学校低学年）における自己表現能力と他者理解並びにコミュニケーション能力を培うことを目標として、幼児教育における造形表現と音楽療法との相互交流による表現活動プログラムの開発と実践、並びにその検証を目的として行われたものであり、日・米におけるワークショップや日・仏におけるフォーラムにおいて、高い評価を得た。以上の2つの研究は造形活動や表現活動を通して、子どもの自己表現能力、他者理解並びにコミュニケーション能力を培うためのプログラムの開発・実践および検証を目的としていた。これらの成果・反省を基底にして、本研究では、「子どもの美的経験」を軸に子どもの表現活動について、アプローチを試みる。

「表現（芸術的表現）」は人類の黎明期から現在に至るまで、人間の本能、衝動ともいえるべき根源的な活動のひとつであった。その上で、子どもの自己活動、自己表現の根源として、「造形活動」を捉え、その上で幼児期、児童期の人間（人格）形成に果たす「表現活動」の意義・役割を考察する。さらに、本研究においては、子どもの表現活動を「子どもの美的経験」と位置付けた国際的な事例を調査・研究する。具体的にはフランス・リヨン市における実践（リヨン市の幼稚園＝参与アーティストによる長期間にわたる子どもとアートの交流）、イタリア・ピストイア市の幼児学校での実践（同市の独自の幼児教育システムの中での表現教育）、日本・広島市の私立なかよし保育園における実践（長期的に民舞に取り組む実践）を調査対象とし、調査・検証を行い、その結果を大学美術教育学会、日本保育学会、日仏教育学会で発表する。

本研究の特色は(1) 表現（造形・音楽・演劇・ダンス）活動と幼児教育を結合して、「表現活動」を幼児・児童期人間の「原初的活動」として人間学的にとらえ、その表現活動の目的を子どもが「美的経験へのアクセス」することにあると設定する。(2) それは、子どもの「経験的活動」に着目することで、「芸術を基礎とする教育システム」の可能性を追求することに繋がる。近年、子どもを取りまく環境が急激に変化し、それに伴う様々な社会問題が表出している。多くの青少年が深刻な危機に直面しているが、その原因の多くは乳幼児期に見出されるとされている。そのような状況の中で幼児期教育の重要性が改めて強調されているが、本研究は乳幼児期の子どもの美的経験を検証することで、今日の乳幼児教育・初

等教育の重要課題に答えようとするものである。(3) そのために、a)2008年と2013年の教育改革を経て経験的実践活動を重視するフランスの芸術教育、b)「子どもの美に対する感覚と親しみの芽を育てることは、基本的な生きる力や人格を育む」とするイタリア・ピストイア市の実践、c)「3歳未満でも“子ども”は存在する。彼らは独立した完全な人間で、我々の関心やスペクタクルを創造する人の関心を十分に惹く価値のある存在なのである。」とする劇団 ACTA (乳幼児を対象とするスペクタクルを創作) d)広島市なかよし保育園の0歳児から5歳児までの発達に合わせた民舞への取り組みを「幼児教育」において検証し、表現教育のプログラムについて考察するものである。

#### 4. 研究成果

2017年度はイタリア・ピストイア市の幼児教育政策に関する文献を翻訳し、教育文化局教育コーディネーターへの質問紙による調査を行った。2018年度はフランスの芸術教育の展開について1980年以降の政府資料を手がかりに調査を行った。またフランスの保育学校2園における調査を行い、2019年度に前年度までに実施した海外調査の検証および発表を行った。2020年度と2021年度は子どもの美的教育に関する文献を収集し、解釈を深めた。フランスの芸術教育思想と実践を基軸としながら、子どもの表現活動の実践事例を基に、「芸術と子どもとの出会い」について調査・検証・評価を行うという目的を達成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小笠原文	4. 巻 7
2. 論文標題 フランスにおける保育学校の動向－小学校への接続を中心として－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小笠原文	4. 巻 9
2. 論文標題 イタリア ピストイア市の幼児教育・保育 - 役務憲章に見る乳幼児期のインクルーシブ教育・	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島文化学園大学 子ども・子育て支援研究センター年報	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小笠原文	4. 巻 67
2. 論文標題 フランスにおける芸術教育の展開に関する考察 - その教育政策と文化政策の関係の変遷に着目して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小笠原文	4. 巻 51
2. 論文標題 現代フランスにおける乳幼児期の芸術活動・芸術教育 - 実践事例から考える子どもの美的経験 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学美術教育学会 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 105-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小笠原文
2. 発表標題 フランス「保育学校の第一の使命は教育である」保育学校の小学校化問題と幼少接続
3. 学会等名 日本保育学会（自主シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小笠原文
2. 発表標題 現代フランスの芸術教育実践とその 理論的基盤
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小笠原文
2. 発表標題 フランスの芸術教育 芸術文化教育パルクール（PEAC）の成立過程を中心として
3. 学会等名 日仏教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小笠原文
2. 発表標題 現代フランスにおける芸術教育の展開に関する考察
3. 学会等名 第57回 大学美術教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小笠原文
2. 発表標題 「学校参与アーティスト」から考察する芸術と教育の関係性 - フランスにおける実践を手がかりに -
3. 学会等名 大学美術教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関